
一秒ごとに

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一秒ごとに

【Nコード】

N5606L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

その日、オレは最大の賭けをおっちゃんとした。

その賭けとは、オレとおっちゃん、どちらが先に博士の作ったクイズアクションバトルゲームをクリアできるか。1週間前。おっちゃんはおレのプライドを傷つけた。

2009年度の『江戸川の日』投稿作品。ちなみにこれはオールキヤラかな。原作重視です。倉木麻衣の『一秒ごとに』のOPを見ながら作りました。長くなりましたが、YOU TUBEなどで検索して、思い出しながら見ていただければ幸いです。どうぞよろしく

お願いします。

前編

オレは江戸川コナン、探偵だ。

見た目は子どもだが頭脳は大人。・・・とはいっても、高校生だから正式にはまだ『コドモ』なんだけど。

ひよんなことで、オレは本来の高校生から小学生に逆戻りして、幼馴染の蘭の家に居候している。

組織を倒し、元の姿に戻るまでオレはずっとこのままだ。

それは長い道のりかもしれないが、すべてが決着する日が一刻も早く来ることを

願っていて小学生のフリをして、幼稚な『お勉強』をして。10も下のクラスメートと、子供向けTV番組の話題を聞いたりして、今頃幼馴染のあいっは何をやっているんだろうだなんて思いを馳せたりして1日を過ごしている。

一方、そんなことを思いつつも、同じような境遇の灰原に言わせると、意外と楽しんでいる』と思われるようで。・・・そして、オレもそのことに関しては否めない。

早く元に戻りたいという思いと、小学生生活を否定して過ごしているというのはイコールではない。オレは、『江戸川コナン』という自分も好きだ。

事件ばかり追っているだけでなく、クラスメートとくだらない話をだべっているだけで

なく、好きな女の子と一緒にいるだけでなく、こういうことができるかと問われれば、もしかしたら高校生のままだったら経験できなかったかもしれない。警視庁のメンバーや蘭の両親と心から笑いあうことも。

とても居心地がいいのだ。

ここは、オレにとってのもう一つの心の居場所。
最近ではそう感じるようになっていた。

そう、そうやって、オレはいろいろ考えてきた。

高校生探偵工藤新一でも、小学1年生だったときの工藤新一でさえも味わえなかった貴重な体験。

江戸川コナンも悪くないなと思えた貴重な体験。

今回はその1つを紹介しよう。

しみじみとそう感じてしまった、一番最近の出来事――。

その日、オレは最大の賭けをおっちゃんとした。

その賭けとは、オレとおっちゃん、どちらが先に博士の作ったクイズアクションバトルゲームをクリアできるか。

1週間前。おっちゃんはオレのプライドを傷つけた。

オレと蘭が子どものころだったから、十数年ぶりくらいに博士の家を訪れたおっちゃん。

博士の発明品である子供用ゲームソフトが、TVゲーム会社『満天堂』からこの秋デビューするらしく。

それのお祝い会としてホームパーティーが行われたのだ。

いくつかヒットした発明品を世に出している博士だが、今回は初めて子ども向け『TV用

ゲーム』として世界に名高い大手会社から世に出ることがとてもうれしかったようだ。

そこで初めてホームパーティーをした。勿論、内輪だけの話だが、それでも毛利一家、

少年探偵団、園子に、警視庁メンバー、喫茶店ポアロのアルバイト店員梓ちゃんを呼んで

いたわけ。家の中も外も人で溢れていた。そんな中で披露した新作発明品のゲーム披露会。

初級中級上級というクイズがあるのだが、それを解きながら、ポイントをとめていく。

クイズといえど、初級はほとんどクイズというより博士の好きそうなさむくいダジャレがメインなのだが、上級となれば完全犯罪級の頭をひねるような推理ゲームのような内容もあり。

上級問題を監修したのが、オレの親父である工藤優作ということもあって、試作品のときにオレは何度もそれに挑戦した。

ゲームが苦手なオレだったが、これを解くのは簡単なことで。アクション要素では敵に何度もダメージを受け、ポイントは減らされる一方だったが、推理力では95パーセントの正答率だったオレは、勿論ボス戦までたどり着き、ゲームでは初めてといっていいほどクリアできた。

だから自信があったのだ。負けることはない、と。
しかし、それは甘かった。

もともとこのソフトには、2パターンの遊び方がある。
ストーリー型（1人用）、バトル対戦型（複数人用）。

その日、オレがおっちゃんと対戦したのが、中級（中級〜上級者向けクイズ）の対戦型だったのだ。

二人でクイズを解きながら、バトルして、相手のポイントを貰っていくというもの。

そうしてオレは負けた。負けると思わなかった相手に、こてんぱんに。

大勢の目の前で、カッカカと鼻高々で背を仰け反らせて笑うおっちゃんと、それを、

「子ども相手にみつともない！コナンくんがかわいそう！」と怒る蘭。

蘭の言葉に、さらにプライドが傷つけられたのを、アイツはわかっていただろうか。

オレはその日におっちゃんに頼んだ。

『1週間後、もう一度ボクと対戦してくれる？』と。悔しがっていることを見せないように、あくまでもポーカーフェイス。勿論、おっちゃんは何度やっても無駄だ、と大笑いしていたけれど。

ズタボロにされたオレのプライドは許されるはずもなく。最後には恥も何も捨てて何度も懇願した。

勿論、子どもの甘い顔のまま。オレの演技は最後まで完璧だったはずだ。そこにいたメンバーの同情による協力も相成って、強い攻めの視線がおっちゃんに纏わりつき、『しゃーねーな』としぶし

ぶながら言った言葉。しかし次に言った言葉でさらにオレの心は傷つけられる。

『やっぱり大人ぶっていてもガキはガキだな。負けるのをわかっていても認めようとはしない。』

初めてやったゲームだったのに、オレとコナン。雲泥の差じゃないか。こんなレベルじゃいくらやっても時間のムダだけど、そこまで言うならやってやる。泣いたって知らねーからな』

その言葉にクスリと笑ったのがおっちゃんの奥さんである妃弁護士。どうやら助け舟を出してくれたようだ。

「腹が立つほどたいした自信ね。そのムダに高すぎる鼻、へし折ってやりたいわ」

「子どもにもできねーことはあるって今のうちに教えるのも教育なんだよ。オレはコナンに愛の鞭でだな」

「そお？ただの弱いものいじめにしか見えないけど」

グサリ。オレの心の傷がナイフか何かで深く抉られた音。

「もし、彼が1週間後勝てたら？」

「勝てねえよ。勝てるわけねえ。近頃のがキはゲームだけは天才だろうと思っていたが、例外もあるんだな。それがこんなに身近にいたとは・・・」

もうどうにでもしてくれ。オレは泣きなくなっていた。

それでも、妃弁護士は援護射撃を続けてくれる。

「じゃあこうしましょう。もし、貴方が負けたら私たちにコーヒー1杯でも奢ってくれる？」

「え？」

「勝てるのよね？」

鋭い妃弁護士的眼光に、一瞬ビクリとたじろいだ。

「あ、歩美アイスがいいなー」

「オレうな重」

「ちよつと元太くん、いくらなんでもそれ高すぎですよー」

すかさず子どもたちがキャツキヤと口を挟み、『それもいいわねえ』と考え込む警視庁の佐藤美和子刑事。

「ちよ、ちよー待て！おまえらっ」

「あ、それならこうしません？今度、ちよつとした新作PRで、屋台を出すんです。そこで新作のソフトクリーム4種類売っていて1個250円」

「1人250円かよっ！待て、コーヒー一杯で」

悲鳴を上げるおっちゃんに、かぶせるように梓ちゃんが『あら』と言葉を挟む。

「コーヒー一杯より安いですよ。ポアロでは1杯300円だし。高いところはもっと高い。それに子どもたちはコーヒーが苦くて飲めないわ」

「ちよ、梓ちゃん。自販機でいいじゃないかよ？子どもたちはジュースがいいって」

「えー、歩美梓お姉さんとこのソフトクリーム食べたーい」

「オレもオレもっ！」

「僕もですっ」

「あ、コラ！話に割り込むな」

「私も」

「え」

「アタシも」

「あ、僕も」

「ちょ、まで、コラっ！」

何人もの賛成意見によりあわてるおっちゃんに、妃弁護士の落ち着いた追撃。

「あら、あなた勝てる自信があつたんではなくて？」

「か、勝てるけどもつ。そんな負担を俺にさせるんだつたら、

・コイツにもそれ相当の」

「あら、子どもに何かを賭けさせるつもり？」

「な、それならソフトクリームだつて」

「これは賭けじゃないわ。彼へのご褒美よ。大人が子どもにご褒美をあげる。当然のことでしょ？」

「ちょー待て。だったらオメーらは関係ねーじゃねーか」

「あるわ。私たちはこの戦いを来週見届ける義務がある。後見人の役。バイトと考えれば安いものでしょう？」

妃弁護士の言葉に、佐藤刑事になるほど、と相槌を打つ。『それなら、私たちも違反にはならない、か』と。

「ちょ！納得すんな！アホ！」

ムツとする佐藤刑事をかばうように立ちはだかり、おっちゃんに向けて抗議するのは高木刑事。

「あ、アホって！佐藤刑事にアホっていいましたね！僕なら何言われても構わないですけど、佐藤さんには・・・」

「わ、悪かったよ」

「ありがと、高木くん」

嬉しそうに佐藤刑事が笑うと、その微笑に高木刑事は頬を紅葉のように一気に紅潮させた。

それを面白くなさそうに見るのは白鳥警部であって……。

「で、どうするの？ 勿論イエス、よね？ 私たちにもアイスを支払う義務の件。」

話を戻したのは妃弁護士。さすがだ。

「義務だったって……。オメーらが勝手に来るだけじゃねーか。来ないなら来ないでいいし。つーかもともとはこのボウズが俺に」

「つべこべ言わない。知ってるのよ。貴方が結婚してから今まで、私に隠そうとしたいくつかの秘密。ネタはあがってるのよ。何ならここで、一つずつ暴いていきましようか？」

「~~~~っ!!」

ギロリと睨んだ妻の形相と、その言葉が何を含んでいるのか。おっちゃんは一瞬時に理解したらしく、ブンブンと涙目になって首を横にこれでもかというくらい振り続けた。

妃弁護士の言う秘密がどのレベルなのかこちらとしてはわからなかったし、もしかしたらおっちゃんが思うところの秘密ではなく、重大な秘密は妃弁護士は実は知らなかったかもしれない。単なるそれもおっちゃんには明かされたくない秘密があるようで。その威力は十分なものだっただ。

「……わ、わかりました」

「よろしい」

ニコリ、妃弁護士は先ほどの般若の顔が嘘だったかのようにきれいな笑顔で微笑んだ。

そこにいるもの誰もが、嘘の微笑みだってことは、わかっていたけれども、何も突っ込みを入れるものはいなかった。

「それじゃ、来週の日曜日、また阿笠邸で。バトルゲームは泣いても笑っても1回のみ。いいでしょ？博士」

「勿論じゃ！」

そうして、この日は終わりを迎えたが――。

それから1週間、オレは寝る間も惜しみ、特訓に特訓を重ね、その日を向かえ、奇跡的にもポイント『オレ52800 対 おっちゃん47200』で辛勝した。

その結果、泣く泣くおっちゃんはオレたちと公約を果たす約束をするのだけれども。

一方で、オレは。おっちゃんの横で種類の違う涙を流しそうになっていた。

この1週間、本当にオレとして初めて最大級の挫折を何度も味わうことになっていたから感極まるところがあつて。

このがんばりは、きつと特訓中傍にいた博士や灰原にさえ伝わっているかもわからないけど。

そう、中級のゲームに、たかがおっちゃんに勝つたくらいで、感動で泣きなくなるまで気持ちが高ぶっていたなんて、絶対わかつ

てほしくなかったのだ。

それもまた、男としての、オトナとしての、オレのプライド。

前編（後書き）

こんにちは、はじめまして。こつぶです。

この作品は、2009年度の江戸川の日参加作品です。もう5回目とか既に何回も開催されているわけですが、そのときのテーマが音楽だったのですよ。企画の中で、コナンの映画アニメなどのOPとEDについて語ったり、妄想した作品を投稿してください的なものがあった（平たくいえば）、もっと丁寧に書いて下さっていたのですが（笑）。

で、リハビリ中のこつぶさんは投稿しました（笑）。

YOUTUBE見ながらがんばりましたよ。皆さん、歌詞見ながら一生懸命考えてステキな作品を作っているのに、私は、アニメーションを見ながら考える考える（笑）。

でも、あれれ、これアニメーションどおりじゃないよ？って思ってますよね。

後半に出てきます。つまり、これはその歌を出すための前置き（笑）

というわけで、引き続きYOUTUBE見ながらお付き合いをお願いします。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

後編

あの日からさらに1週間後とちよつとすぎたその日。すべてのメンバーが揃うとある水曜日の午後。

約束の時間30分前に毛利探偵事務所を訪れたがそこにはもぬけの殻で。

「逃げたぞ！」

「え、まさかつ！」

「やだー！！アイス食べられなくなっちゃう！」

元太の声に、光彦、歩美ちゃんが悲鳴を上げる。そこに灰原がいないのは、どうやら直接公園に向かうようで。なにやら用事があるんだとか。まあそれも灰原らしいっちゃ灰原らしいけど。

「ちよつ、コナンくん、何一人ぼーとしてるんですかあ！ソフトクリーム逃げちゃいますよ！」

光彦がオレを急かした。その焦りようにオレはにやりいつもの顔で笑う。子どもたちや、服部やキッドたちなど特定の相手にしか見せられない、犯人を追い詰める『大人の顔』。

「大丈夫だ。おっちゃんが行く場所くらいは見当がついてるよ。多分多くの敵がいるから、変装してるだろうけど」

「変装？なんだか犯罪者みたいだな」

「犯罪者だよ、だって約束やぶったもん」

「そうですね、れっきとした詐欺ですよ！」

キヤツキヤと盛り上がる少年探偵団を横目にオレは時計を見る。

メンバーが集まるのはPM15時ジャスト。場所は米花湖畔公園。残る時間は27分34秒。いける。

「うつしゃー！じゃあ早速はじめっか！」

「お、なんかコナンくん今日すごくテンション高いv」

「きつとあのゲームにすごく思い入れがあつたんですよ・・・」

「そっか？ただソフトクリーム食いたただけじゃねーのか？？」

「？」

コソコソコナンを見ながら内緒話をしている子どもたちを尻目に、オレはソーラー型スケートボードを走らせた。

「じゃー、オレ先におっちゃんがいるような場所・・・そうだな、麻雀屋あたりまで行ってみるから、オメーらは」

「あつ、コナンくんだけずるーい！！！」

「手柄を独り占めする気ですね！」

「そーだぞー！！捕まえてもオレたちの分のソフトクリームは絶対とつとけよ！約束だかな！」

ゼエゼエいいながら追いかける少年探偵団に向けて、コナンは大声で叫んだ。

「バーロ、四散して、オメーらもおっちゃんがいそうな場所を探すんだよ。バッチがあるんだ。ちゃんと情報を伝えあうんだよ。一人が遠くまで行っておっちゃんを目的地まで追い詰めないと時間が間に合わねーだろ。おっちゃんは絶対湖畔公園から離れようとしているだろうから！」

「あ、そっか。さすがコナンくんっ！」

歩美の言葉を背中に、オレはおっちゃんを追いかけて、スケート

ボードをさらに風に乗らせて走らせた。
ホシを逃がすわけにはいかない。

オレのプライドにかけて。

それから23分後。オレは、いや、オレたちはようやくおっちゃんを捕まえた。

捕まえたときの服装は、夏なのにロングコート、帽子にサングラスにマスク。明らかに怪しい姿。

だからこそ見つけやすかったこともあったが。

そうして念願の勝利品を手に入れた。15人分の勝利品。

甘いのがそれほどスキなわけではないけど、
そうしてそのソフトクリームのレシピがどこの店と違っていただけでもないだろうけど、

それでも、オレにとってこのソフトクリームはどこの店よりも、
誰のものよりも格別に美味しかった。

それはオレが汗水たらして勝ち取った大切な、そして特別な戦利品だから。

「おいしーい！！！！やっぱり夏にソフトクリームは最高よね！」

待ち合わせ時間には全員揃っていて。梓ちゃんが忙しそうにソフトクリームを作ってくれた。

ペロペロとソフトクリームを舐めながら女性陣。大人になっても甘いものはやめられない。

千葉刑事なんて、元太と負けじと両手にソフトクリームを抱えてて。それを白い目をして白鳥

警部は睨んでいる。

「なんて顔してんすか。食べたくないんなら、俺、もらっちゃいますよ。おねーさん、もう一つ俺にっ」

「えー、ずりーぞ、千葉刑事！そんな食い意地張ってたら博士みたいにトーニョービョーになっちまうぞー！！」

「そういう元太くん、キミだって」

「オレは子どもだからいいんだぞー！」

元太と張り合う千葉刑事に、『まったく何やってんのかね』と呆れた表情で溜息をつくのは上司の

目暮警部。そうして博士は『まだ糖尿病じゃないわい』と呟いた。
『結構危ない状態とこにいる

けどね』と、灰原。『それにしても彼がよくそんな難しい言葉知ってたわね。えらいじゃない』クスリ、灰原が笑った。

オレは蘭とベンチで仲良くソフトクリーム。口についたクリームを、『ついてるよ』と言って、

ハンカチで拭ってくれる。それを歩美ちゃんたちは『コナンくん赤ちゃんみたい』と冷やかした。

「そっすいえばね」

すべての人たちにソフトクリームがわたり、ひと段落したときに梓ちゃんが教えてくれた。

「そっすいえば10月の5日から7日は、うちによく来るかわい
いお客様をイメージしてのケーキも

そこで販売することも考えてて」

「・・・え、ちよっと待って、それって」

蘭の問いに、梓ちゃんはにつこり笑ってオレの方へスマイルを
向ける。

「え、ボク？」

「そう。10月5日、7日。え（10）がわ（5）（7）ん。

“え・（ど）・が・わ・（こ）・（な）・ん” 頭いいでしょ！」

「すっげー！！考えたの梓ねーちゃんか！？」

「いえ、・・・実は大学の友達だけだね。私がそっすいお客

さんいるのよって言ったら、3人とも

実はコナンくんの大ファンだったみたいで。」

「えー！？何で？」

「ほら、コナンくん有名人だから……。最近よくキッド関連で新聞に載るでしょ？それで実はこっさり江戸川コナンファンクラブとか結成してたんだって。だから知り合いだってことにびつくりされて。せっかく知り合いなんだから、うちのファンクラブとコラボしない？って」

「えー、歩美もファンクラブ入りたーい！」

「ふふ、どうかしら。聞いてみるね。私もまだ正式には入れてないんだ。忙しくてクラブ活動できないかもって思ってた。コナンくんへの愛は人一倍なんだけどね！」

梓ちゃんがかわいくウインクすると、オレは思わずドキッと胸が高鳴った。

「え！それじゃ歩美と梓お姉さんとはライバルだ〜！」

「え、そうなのー！」

盛り上がる歩美ちゃんと梓ちゃんにオレは恥ずかしくなってそっぽを向いた。こういう話はやっぱりたとえその気はなくても、恥ずかしい。

それを他人事だからなのかクスリとクールに灰原が笑ってポンと背中を叩いた。

「ずいぶんの人気者ね、あなた」

「は、ハハ」

笑うしかないのだけれども。
そんな感じの日常。

「でも、楽しかったね」
「そうね」

歩美ちゃん言葉に、灰原が同意する。

「また、やりたいね、こういうの」
「江戸川コナンの日に？」
「そう。コナンくんのケーキを賞金に！またおじさんに」
「1つ450円となります！」
「やめてくれー！！」

その言葉に、おっちゃんが甲高く悲鳴を上げて、遠くの方へ逃げていった。

8月の下旬 水曜日の午後。
真つ青な空に、キレイな湖が遠くに見えて。

皆の楽しそうな笑い声が大空いっぱい、響き渡った。

あれからほぼ1ヶ月と半月。
今日は10月5日だ。『江戸川コナンの日』。
月曜日の午後。博士の家で、オレはまた、おっちゃんと賭けをしている。

実は人がいいのか、それとも押しに弱いだけなのか、今回も結局おっちゃんはオレの、いや『オレたち』の制約を受け入れてくれた。

『コナンが勝つたら江戸川コナンの日特製ケーキを蘭と園子と子どもたちに奢る』

今回はおっちゃんの財布の事情から、大幅に参加者は少なかったけれども。

後ろから熱い怨念のようなものを感じつつ、そして横で闘志を燃やすおっちゃんのパワーを

感じつつ、オレは開始のゴングが鳴るのを今か今かと待っていた。

< F I N >

後編（後書き）

江戸川の日、バンザイ！・・・10月は遠い。2010年度もあるかな。そして参加できるかな。

ちなみに梓ちゃんの友達のサークルの女の子達は、主催者さんたちと掛けてみちやいました（笑）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5606/>

一秒ごとに

2010年10月13日16時57分発行